

一八世紀中期のホラーサーン

——ドッラーニー朝とナーデル・シャー没後のアフシャル朝——

小 牧 昌 平

はじめに——問題点と史料について

第一章 一七四九—五〇年の政變

第一節 第一次政變

第二節 政變の背景

第三節 第二次政變

第二章 アフマド・シャーの第二回ホラーサーン遠征

第一節 遠征の時期と回数

第二節 第一回遠征の経緯

第三章 アフマド・シャーの第二回ホラーサーン遠征

第一節 ホラーサーンにおける内部抗争

第二節 第二回遠征の経緯

結 語

はじめに——問題点と史料について

一七四七年六月のナーデル・シャー Nader Shah Afshar の暗殺は、アフシャル朝のみならず、周邊諸勢力に多大

の影響を及ぼした。

強烈な個性を持つナーデル・シャーを失ったアフシャル朝内部は大いに動搖し、深刻な後継者争いが起こった。各地の諸勢力はこれに乗じて自立を圖るようになり、イランは分裂の時代を迎えることになった。さらに、ナーデル・シャーの配下にあったアフガン系の者たちの中には、郷里に歸還して自立を圖る者も出た。それが同じ一七四七年七月にカンダハール Kandahar で自立を宣言したアフマド・シャー Ahmad Shah Dorrani⁽¹⁾によるドッラーニー朝の成立⁽²⁾である。

ドッラーニー朝の成立については、しばしば現代アフガニスタンの原型の成立という評價がなされている。しかし、それをもってイランとの分離が達成されたというわけではない。むしろ、同朝の存在を無視しては、マシユハド Mashhad を中心とするホラーサーン Khorasan 地方の状況を考察することはできない。そこで、本稿においては、成立直後の時点におけるドッラーニー朝とホラーサーン地方との關係に焦點を當て、イラン研究における同朝の持つ意味について具體的に考えていくことにしたい。

現在、「ホラーサーン」といえば、イラン・イスラム共和国の北東部のホラーサーン州 (Ostan-e Khorasan) ということになるが、元來はヘラート Herat やバルフ Balkh なども含み、現在の地域からさらに東方や北東方にも廣がるはるかに廣い領域を指していた。そうした點からいえば、ドッラーニー朝とホラーサーンとが不可分の關係にあったということは、ある意味では當然のことである。しかし、それではその廣義のホラーサーンがどこまで實體をもって連綿と存続してきたのかについては、慎重に検討する必要がある⁽³⁾。ここではその點については直接取り上げる餘裕はないが、それについての一つの事例を提供できるものと考ええる。

一八世紀中期のホラーサーンについての利用可能な同時代史料はきわめて少なく、事實關係においてすら不明な點も少なくない。このような史料狀況は、以下のような事情によるものと思われる。

この當時のホラーサーンはアフシャル朝の支配下にあったが、後述の通り、ドッラーニー朝の強い影響下にあった。

一八世紀後半のアフシャール朝期の史料で、刊本化されているものはほぼ皆無といつてよからう。この時代、イラン高原で最も優勢であったザンド朝においても、ドッラーニー朝との直接対決につながりかねないホラーサーンへの進出には消極的であり、そうしたことから、ザンド朝期の史料には同地方についての記述はさほど多くない。カーシャーール朝期の史料では、一七九六年のホラーサーン征服を除けば、同朝創始者アーカー・モンンマツ Ägä Mohāmmad Shāh の活動はホラーサーンとはなほど關わりがなく、同地方に關する記述も断片的なものだけである。

そうしたなかで、本稿で利用する主な史料とその引用上の略號は以下の通りである。

AD: Mohāmmad Hashem b. Seyyed Mohāmmad Mirzā; *Tazkere-ye Āl-e Davūd* (4)
(British Library, MS, Or. 154)

ASh: Mahmud al-Hoseini al-Monshi b. Ebrāhim al-Jāmī; *Tarikh-e Ahmad Shāhi*
(*Tā'pūx-u Aẓmad-IIIāxū*, 2r, Москва, 1974)

MT: Abū al-Ḥasan b. Mohāmmad Amin Golestāni; *Mojmal al-Tavārikh*
(ed. by Razāvi, M., Tehrān, 2nd ed., 1344/1965-6)

MaT: Mirzā Mohāmmad Khalil Mar'āshi Šafavi; *Majma' al-Tavārikh*
—— *Dar Tarikh-e Engerāz-e Šafaviyye va Vaqā'e-ye ba'id tā Sal-e 1207 AQ*
(ed. by Eqbal, 'A., Tehrān, 1328/1949-50)

これらのなか、AD・MaT は、いずれも本稿の主要な登場人物の一人であるセノエド・モンンマツ Mirzā Seyyed Mohāmmad (シノノペーン二世 Soleimān II) の近親者であった。また MT もその關係者であった書かれたものである。(5) その利用に關しては、細心の注意が必要である。しかし、從來、史料が絶對的に少なう一八世紀中期のホラーサーンについては、これらの史料に頼らざるを得ないところが多かった。

これに對して、Ash はアフマド・シャーの命で執筆された同人の一代記という性格上、ドッラーニー朝の史料と理解され、イラン史研究の立場からは從來あまり注目されてこなかったようである。しかし、著者のマフムード・アル・ホセイニーは、元來ナーデル・シャーに仕えており、またシャールーフ政權にも參畫していた人物で、その點では當事者であり、同時代の貴重な證人でもあった。⁽⁶⁾

つまり、Ash をアフガン側史料とのみ捉えるのは實は正しくなく、ホラーサーンについても、貴重な史料なのである。そして、少なくともセイエド・モハンマドをめぐる記述に關しては、AD・MAT よりも客觀性が高いと考えられるし、アフマド・シャーのホラーサーン遠征についても當事者による記録であり、立場の異なる AD・MAT などの他史料と比較検討することで十分に利用する價値がある。そこで、本稿では Ash も基本史料として利用することにした。

第一章 一七四九—五〇年の政變

第一節 第一次政變

ナーデル・シャー暗殺後のアフシャル朝内での後繼者をめぐる抗争は、當初、その甥が實權を掌握し、アリー・シャー (Ali Shah) (またはアーデル・シャー (Adel Shah)) として即位し、ナーデルの直系の子孫を、孫のシャールーフ Shahrokh を除いて根絶した。しかし、エスマハン Esfahan に派遣されたアリー・シャーの弟エブラーヒム Ebrahim が反旗を翻し、討伐に出た兄を破って捕えた。

こうした中、ホラーサーンの諸勢力は、エブラーヒムがエラクク Erak を本據にしたことから、權力の中樞がホラーサーンを離れることを望まず、マシェハドに残っていたシャールーフを擁立する動きを見せた。シャールーフもそれを承け、一七六一一年 Shavval 月八日—一七四八年一〇月一日、即位してシャーと稱した (Ash77a, MT30)。このとき

チャーロフ擁立の中心人物は、ハブーシャー・ン Khabushan (現、クーチャー・ン Quchan) に據るクルド系(?)のモハンマド・ジャアファール Moḥammad Ja'far Khān Marīnānī Zā'farīnī Kord とニーシャー・プール Nīshāpur のキハンマド・ハサン Moḥammad Hasan Khān Bayāt じぎた (ASh77b)。

チャーロフに對抗し、エブラーヒームもシャーを稱してホラーサーン侵攻を圖った。しかし、彼の陣營からは次々と武將たちが脱落し、チャーロフ側に走る者も少なくなかった。⁽⁸⁾ その中にはキズイルバーシエの者が少なくなかったが、これはチャーロフがサファヴィー王家の血縁者でもあったこと(後述)によるといわれている (ASh79a)。このため、チャーロフは弱體化したエブラーヒーム軍を破つて、エラーク方面に追つた。彼はさらに自らエラークやアゼルバイジャン Azarbaijān に出陣しようとして、クルド系やトルコ系などのホラーサーンの諸勢力と見解の相違が生じることになった。

彼らは、ウズベク人やアフガン人と對峙しているホラーサーンの現況を考えれば、遠征でこの地を離れることは得策ではなく、エブラーヒームについては、大軍ではなく少數の追尾軍を出せば十分であると主張した (ASh80a)。しかし、あくまでイラン中央部制壓を目指しての遠征を望むチャーロフとの間は緊張したものとなった。チャーロフは自分に忠實なカーエン Qāyen の有力者でアラブ系のミール・ナラム Mir 'Alam Khan 'Arab Khazime やキズイルバーシエ系の武將たちの支持を取り付けてアスタラーバード Astārābād まで進軍するが、ホラーサーンの武將たちに不穩な動きが出てきたとの知らせに、急遽歸還した (ASh81a-84b)。

このようなチャーロフと地元勢力との微妙な緊張關係に着目し、それを利用してホラーサーンで自立しようと畫策したのがミール・アラムであった。彼はモハンマド・ジャアファールと姻戚關係を結んで同盟を結び、計畫を實行に移した。その際にチャーロフに代わって擁立を圖ったのがセイエド・モハンマドであった。

セイエド・モハンマドは、母がサファヴィー朝のシャー・ソレイマーン Shah Soleiman (在位、一六六六—一六九四)

の女であり、父方も辿っていけばアッバース一世 (Abbas I (在位 一五八七—一六二九)) に至り (〔関係系圖〕参照)、代々側近として國王近くに仕えて重用されていた家柄であった。サファヴィー朝滅亡後は、セイエド・モハンマドはナーデル・シャーの庇護下にあつたが、ナーデル・シャーのインド遠征からの歸還後、レザー廟の管理者 *motavalli* に任ぜられた (AD73b)。(6)

ナーデル・シャーの暗殺後はアリー・シャーやエブラーヒームに従い、その命令でコム・Om に駐留した。エブラーヒームがシャーロフに敗れ、コムに逃走しようとする、その入城を拒否して反抗の意志を明らかにした (MT343b)。(9) そうした中、イラン各地からセイエド・モハンマドに對する即位要請が届くようになった。その中には、サファヴィー王家の再興を訴えるホラーサーンの諸勢力からの要請もあつた。(11) それに加えて、捕えられたエブラーヒームをマシユハドに連行するようシャーロフから命じられたため、彼はホラーサーンに向かうことになった (AD88a)。

セイエド・モハンマドのホラーサーン入りは同地方の諸勢力に大きな波紋を投げかけた。シャーロフは表面上はこれを歓迎したが、彼の存在に脅威を感じて秘かにその抹殺を計畫し、ベフブード *Behbud Khan Fatar* という武將に殺害を命じた。しかし、その人物は他の諸勢力とともにむしろセイエド・モハンマド支持に走り、恭順の意を表した (MT38, Mat109-110)。(12) 一六三三年 *Moharram* 月二〇日—一七四九年二月三〇日、シャーロフはこれらの者たちの壓力により退位させられ (MT45) 同年 *Safar* 月五日—一七五〇年一月一日、セイエド・モハンマドは即位して、母方の祖父の名を採つてソレイマーン二世と稱した (MT46)。(13) 即位の際には、エラーク、アゼルバイジャン、ファールス *Fars* などからもアミールたちが参集したという (AD95b)。これが政變の前半であり、ここでは「第一次政變」とする。

第二節 政變の背景

「第一次政變」自體はよく知られており、ペリー氏などはこれを當時根強くあつた「サファヴィー王家復興」運動の一

部として言及している。氏によれば、一七二二年のサファヴィー朝の事實上の滅亡後も同王朝を正統なイランの支配國家と見なす風潮が残っており、そのために、一七七三年に至るまで、多くのサファヴィー王家の一族と稱する者が王位請求者として登場した。その中の一人がセイエド・モハンマドであった。⁽¹⁴⁾

しかし、第一次政變をこのような運動の一環と斷言することには注意が必要である。ペリー氏も指摘しているように、すでにナーデル・シャーによって達成されたイランの統一は瓦解し始めていた。そうした群雄割據の状況の中で、この政變をサファヴィー王家復興運動という流れでのみ捉えるのはあまりに名目的に過ぎるであろう。たとえ、建前上の理由から、あえてそうした運動の一部として捉えようとしても、シャーロフ自身もサファヴィー王家の血統を繼いでいる（關係系圖〔参照〕）ことから、論理的に矛盾することになる。シャーロフはそうした出自のために、アリー・シャーによるナーデル・シャーの直系子孫の虐殺を唯一生き延びたのである。⁽¹⁵⁾ また、シャーロフがサファヴィー朝滅亡の張本人であるナーデル・シャーの孫であり、イランの君主には不適切といった議論は説得力を缺くように思われる。⁽¹⁶⁾

むしろ、この政變はそうしたサファヴィー王家復興運動の一部と考えるより、ホラーサーン内部での権力闘争の一部として捉えるべきであろう。この問題を考える上で興味深い記述が ASH にいくつか見られる。それはたとえば以下のようなものである。

（クルド系やトルコ系のアミールたちは次のように）語った。ホラーサーンのクルド系・トルコ系の人々は、二本の恐ろしい潮流の間に、すなわち、ウズベク系やカンダハールのアフガン系の間に居住している。そして、この恐怖の二集團と常に對立・抗争の中にあり、絶え間ないいくさや争いのために、人としての安らぎを缺いている。

（... mi' gofand ke mardom-e Akrad va Artrak-e Khorāsān mabein-e do selāb-e por-ashob ya'ni iāyefe-ye Ouzbek va Afaghān-ye Qandhār nashmin dārānd va bā in do farīq-e jāladāt-īarīq hamīshe khošūmāt va nezā' dar-miyān va jāng va porkhāsh-e dāyemi moujeb-e 'adam-e eīmān-e ensāni ast...）(ASh80a)

このようなホラーサーンの諸勢力の持つ、周辺地域の勢力に對する敵對意識・對抗意識のようなものが何に基づくのかについては、慎重に検討せねばならない。しばしば言及されるシーア派對スンニー派の對立といった説明だけでは不十分なことは、たとえば、前述のミール・アラムとモハンマド・ジャアファルとの間での策略の際に、兩者の間で合意された内容についての、以下の記述からも推測できよう。

ウズベク系やアフガン系だけでなく、エラーク、ファールス、アゼルバイジャン方面からの敵がホラーサーン征服を圖るのならば、(ホラーサーンの)すべてのアミールがその排除に當たる。

(...agar doshmani az qabil-e Ouzbek va Afghān yā az semat-e Erāq va Fārs va Āzarbāijān edāre-ye taskhir-e Khorāsān namāyād, tamāmi omārā mottalef shode be daf'-ye ū pardāzand...) (ASh88a)

ホラーサーンの諸勢力はこのような意識を共有していたようであり、第一次政變の際にシャールーフを見捨てたり、従来の對立・緊張關係を保留して外敵に共同して當たることすらあった。⁽¹⁷⁾ こうした同一地域に居住することから生まれる意識は、もっと注目されるべきであろう。

さらに、それに加えて、以下のような記事も見られる。

ペルシヤ語を話すアラブ系やホラーサーンのタージーク系は、亂暴者のクルド系や不純なトルコ系の行いを輕蔑することともに、怖れていた。

(...īlāt-e A'rāb-e Fārsī-zabān va jamā'ate Tāzīkiyye-ye mamlekat-e Khorāsān ke az solūk-e Akhrād-e jalādat-nezhād va Atrāk-e bi-pāk ehānat-gash va herāsān būdand...) (ASh81b)

つまりここで述べられているのは、ホラーサーンでは諸勢力が一致して事態に對處する用意があったその一方で、その内部では、アラブ系、トルコ系、クルド系などの間で、深刻な對立・緊張關係が存在したということである。このような關係をどう解釋するかは難しいところである。もちろん、現代的な意味での民族問題などと同列に論じることはできない。

しかし、この時代にも集團間の利害の對立や緊張を生み出す要因はあったことは當然であり、そうした各集團の動きを追跡することで、複雑な権力抗争の性格が見えてくることも考えられる。

こうした點を踏まえながら、當時の政治状況を再検討して行くこととする。そのためにも、まずこの政變の後半を追って行くことにする。

第三節 第二次政變

第一次政變によって即位したソレイマーン二世によって、ほどなく新政權の人事が公表された。これは政變の論功行賞と見ることもできる。そのうちの主要なものは以下の通りである (AD 101b-102a, MT 46-47, MaT 119-121)。(18)

Motavalli	Soltān Dāvod Mirzā (ソレイマーン二世の弟)
Nāyeb-e Toulīyat	Mirzā Moḥammad Amin b. Mirzā Shams al-Dīn Moḥammad Mūsavi
Vakīl-e Moḥlaq	Amir 'Alam Khān Khazime
Qorchi-bāshi	Ahmad Khān Bayāt
Tupchi-bāshi	Amir Khān 'Arab Mish Mast
Tofangchi-āgāsī	Mahdi Qolī Khān Chūle (MaT 122 Mahdi Khān)
Nāzer-e Karkhānejāt-e Shāhi	Amir Mehrāb Khān 'Arab
Ishīq-āgāsī-bāshi 兼 プスタラービーヤの beglarbegī・sardār	Moḥammad Ḥasan Khān Qājār
ホラーサーンの beglarbegī	Behbūd Khān Atoki

これを見るに、父の職を継いだ長子を除くと、ここに擧げられている者たちがソレイマーン二世擁立の中心人物という

ことになる。アミール・アラムがヴァキールに就任したのを筆頭に、要職にはアラブ系やキズイルバーシュなど、かつてシャーフを支持していた者たちが擧がっている。

一方、ソレイマーン即位の直後、シャーフはアミール・アラムによって官刑に處せられた。その経緯については、ASH以外の諸史料は、ソレイマーンが狩獵で留守にしている間に行われたとする(AD109b, MT50, MaT129)。これに對し、ASh93bでは、シャーフ救出の陰謀が發覺したため、ソレイマーンの同意の上で行われたとする。この相違は、ソレイマーンの關係者によって書かれたAD, MaTなどが彼のこの件に關する責任をできるだけ回避させようとしたことから生じたとも考えられ、結局は史料の立場の違いに基づくものと思われる。今のところ、いずれが正しいかは即斷できない。

ソレイマーンがシャーフ官刑に關與しなかったとする立場の諸史料においては、事態を知ったソレイマーンは、怒つてアミール・アラムをヴァキール職から解任する人事一新を行つた。⁽¹⁹⁾ それを見る限り、クルド系が重用されていることが判り、ソレイマーンが第一次政變後、ヴァキールとして實權を掌握して臺頭したアミール・アラムの勢力の擴張を警戒して、代わつてクルド系の支持を得ようとしたことが推測される。

こうしたソレイマーン政權の混亂の中で、シャーフ側は巻き返しを圖っていた。シャーフ夫人はひそかにホラーサーンの武將たちにシャーフ復位に盡力するよう要請する書狀を出していた。⁽²⁰⁾ さらに、カラート Kalāt に據るトルコ系のユースフ・アリー Yusuf 'Alī Khan Jalāyer は當初からシャーフに仕えており、その復位の機會を狙っていた。彼はアミール・アラムに反發するアラブ系やトルコ系の者たちを糾合した。たまたまアミール・アラムの兄弟の葬儀が行われた際の混亂と警備の手薄さに乗じて、一一六三年 Rabī' II 月一日／一七五〇年三月九日、ユースフ・アリーらはソレイマーンを襲撃して、捕えて幽閉し、代わつてシャーフを釋放して復位させた。⁽²¹⁾ 第一次政變からわずかず七日あまりであった。これを「第二次政變」とする。そして、新政權ではユースフ・アリーがヴァキールに任じられ、實權を掌握し

た。一方、この事態を知ったアミール・アラムなどはかろうじてマシユハドを脱出して、アフマド・シャールの許に逃走した。

第二章 アフマド・シャールの第一回ホラーサーン遠征

第一節 遠征の時期と回数

アフマド・シャールは數回にわたってホラーサーン遠征を行った。この遠征の持つ意味については、これまで検討されたホラーサーン情勢と関連づけて論じられたことがほとんどなかった。そうしたこともあり、彼の遠征については時期や回数といった事實關係についても、あいまいなままに留められているのが現状である。

この遠征との同時代史料の中では、ブハーリーの史料はアフマド・シャールの治世のすべてを對象年代としているが、一回の遠征しか言及しておらず、しかもその年代についてはあいまいな記述しか残していない。⁽²²⁾ MJも、第一回と第二回の區別に今ひとつ不明確なところがある。カーシャル朝期の史料は、一八世紀中期のホラーサーンについてはほとんど言及しておらず、この問題については不明瞭なままである。⁽²³⁾

従來の研究の中では、アフマド・シャールについての現時点での最も詳細な傳記的研究を行ったスィング氏は、一七四九年春のヘラート遠征に始まり、一七五〇年初の一時歸還をはさんで一七五一年初の再度侵攻でマシユハドなどを征服したものと、一七六九—一七七〇年の遠征を擧げている。しかし、その最初の遠征についての時期の比定はやや明瞭さを欠いている。⁽²⁴⁾ これに對して、MJの校訂者であるラザヴィー氏は、同書の註において綿密な考證を行い、彼の遠征を一七五〇年後半、一七五四—一七五五年、一七六九—一七七〇年の三回と結論づけている。⁽²⁵⁾

このように、アフマド・シャールのホラーサーン遠征について、事實關係の確認すら見解が分かれる要因は、記述量が少

なく、さらに諸史料の年代等の記述があいまいなものが多い上に、特に第一回と第二回については、遠征の過程が結果的にかなり重複して混乱を招きやすかったことが挙げられる。結局は、信頼の置ける同時代史料が不足していることが最大の原因であるといえよう。

その點で、ASH はアフマド・シャー自身が自らの事績を記録に残すために書かせた史料であり、彼の業績については数少ない信頼の置ける史料である。そして、ASH でも基本的には MT と事實關係の記述では大きな相違はなく、結局は、ラザヴィー氏の示した回数と時期とが裏附けられることになる。ここでは、この二史料を中心にしてアフマド・シャーの第一回と第二回のホラーサーン遠征を検討し、その問題点を指摘したい。

第二節 第一回遠征の経緯

アフマド・シャーは、一七四七年の即位後、東進してガズナ Ghazna・カーブル Kabul を支配下に入れ、一七四八年にはラホール Lahore まで征服した。東方で一定の成果を上げたアフマドには、ヘラートからホラーサーン方面が残されていた。

ドッラーニー朝から見れば、ナーデル・シャー暗殺後の政治變動により、マシヌハドとの關係は緊迫したものになっていた。既にヘラートを制壓していたアフマド・シャーに對し、ソレイマーン二世はヘラートからカンダハールまでの領有權を主張する書状を送ったため、怒ったアフマドは使者を處刑したほどであった (MT 48, MaT 136)。このため、ソレイマーンは、ベフブードやアミール・ハーン Amir Khān 'Arab Mish Mast をヘラートに派遣して征服し、ベフブードとアミール・ハーンは駐留軍としてヘラートに留まった (MT 48-49, MaT 124)⁽²⁶⁾。駐留軍は第二次政變を知り、動搖は隠せなかったが、かろうじてヘラートの保持とアフガン軍への警戒の姿勢を保った。

一方、第二次政變で身の危険を感じて脱出したアミール・アラムは、カンダハールのアフマド・シャーの許に至り、マ

シュハドの状況を伝えるとともに、ホラーサーン遠征を進言した (ASh106b-107a)。これによって、アフマドはホラーサーン遠征を決意し、まずヘラートへ向けて進軍した。ASh などには出陣の具體的な日附の記述がないので、正確な時期は不明であるが、三月九日の第二次政變後であることは明白であり、かつ、ASH109b に、一七四九年一月より始まるイラム暦一六三年のノウルーズ以前にアフガン諸軍に召集がかかり、參集の後カンダハールを出陣したとあるので、一七五〇年三月後半か四月頃と推測される。

アフガン軍はヘラートに入ると、これを包圍攻撃し始めた。これに對して、シャーロフからヘラートの將軍 *sardār* に任じられていたアミール・ハーンは防衛に努めるとともに、マシュハドに援軍を要請した。これを承けて、ユーソフ・アリーはシャーロフを擁して出陣し、ニーシャープールを経てトルバテ・ヘイダリエ Torbat-e-Haidariyye に至った (ASh118a-b)。ここでユーソフ・アリーは本據地のカラート方面がウズベク系に襲撃されているとの連絡を受け、急ぎ歸還した。他の武將たちもアフガン軍の強大さに恐れをなして、さまざまな口實で脱落していった (ASh118b)。シャーロフはアミール・アラムに書状を送り、舊罪を赦すとして歸還を促した。これを受け入れて、彼は赦しを乞うて服従した (ASh119a-120a)。しかし、シャーロフは服従せずに抵抗するハーフ *Khaf* の征服に手間取り、同地に足止めされることになった。

シャーロフ軍が接近しながらも途中で手間取っているという状況から、アフマド・シャーはヘラート征服を急いだ。既に包圍は四ヶ月に及び、市内は飢餓状態で悲惨な状況になっていた (ASh123b-123a)⁽²⁷⁾。シャーロフの援軍がなかなか来ないことから、アミール・ハーンは限界と考え、アフマド・シャーに降伏した (ASh124b)。

ヘラート陥落の知らせを受けたシャーロフ軍には動搖が廣がり、軍は四散してしまった。シャーロフ自身もかうじてマシュハドに逃げ歸ったが、身の危険を感じて、クルド系のモハンマド・ジャアファルに援軍派遣を要請した (ASh132a-133a)⁽²⁸⁾。進軍してきたアフマド・シャーはシャーロフとの會見を要求したが拒否されたため、マシュハドを包圍攻撃した。

その一方、アフガン側は軍の一部をクルド地区に派遣してモハンマド・ジャアファルらを破ったため、マシユハドのクルド軍は大いに動搖して多くは歸還し、マシユハドの防衛軍は縮小することになった (ASH139a)。こうした中で包圍は四〇日間續いたが、戦局が不利なマシユハド側は結局降伏することとなった (ASH40a-r)。おそらく、一七五〇年秋のことと思われる⁽²⁹⁾。この後、アフガン軍は、ハブーシャー、ニーシャープール、サブゼヴァール Sabzevar などを征服して、撤退した (ASH143b-145b)。

こうして、ホラーサーンはアフマド・シャーの影響下に置かれてしまった。この遠征の際には、ホラーサーンの諸勢力は二度の政變をめぐる對立關係をほぼ解消して一時は連合してアフガン軍の侵攻に備えたが、結局はその軍勢力に屈してしまつたことになる。

第三章 アフマド・シャーの第二回ホラーサーン遠征

第一節 ホラーサーンにおける内部抗争

アフマド・シャーのホラーサーンからの撤退後、トルコ系のユースフ・アリーがマルヴ Marv 近郊にまで進軍したことがきっかけで、マルヴ軍がこれを追つてマシユハドにまで侵攻し、これを占領した。これにより、マルヴ知事 taken のアリー・ナキー 'Ali Naqi Khan が、一時、全ホラーサーンの太守 *shah-ekhtiyar* を稱するに至つた。

これに反發したのが、クルド系のモハンマド・ジャアファルとアラブ系のアミール・アラムである。彼らは共同でマルヴ軍をマシユハドから追放することに成功した。そして、兩名はシャーロフの下でヴァキールを務めることになった (ASH166a)。この事件では再びホラーサーン諸勢力の共通の意識が働いたともいえるが、一面では、アミール・アラムがクルド系と結びつることによって、ユースフ・アリーが第二次政變によって獲得していた實權を奪回したとも解釋できる (ASH202a)。

アミール・アラムは、マシユハドをモハンマド・ジャアファルに託して、ハーフの平定とヘラト侵攻を圖つたが、その途中で、アフガン軍に大敗を喫して、本據地の一つであるトゥース (Tus (現、フェルドゥース Ferdous)) へ落ちていった (ASh166b)。アミール・アラムはクルド軍が援軍に駆けつけることを期待していたが、モハンマド・ジャアファルはこれを機會にアミール・アラムから距離を保とうとしたため、兩者の關係は悪化した (ASh203a)。

このため、態勢を立て直したアミール・アラムは、一一六五—一七五二年早春には、マシユハドに歸還し (ASh203b)、モハンマド・ジャアファルを追放して、代わってユーソフ・アリーを呼び寄せた (ASh204a)。兩者は姻戚關係を結び、新たな同盟關係を構築した。これはクルド系に對抗するための同盟であり、名目的には盲目のシャーフを立てながらも、ホラーサーンでの覇權獲得のために、舊來の對立・抗争關係を超越して同盟が結ばれたことになる。つまり、アラブ系のアミール・アラム、クルド系のモハンマド・ジャアファル、トルコ系のユーソフ・アリーの三勢力を軸にした、對立・抗争の圖式が明確になった。

これに對抗して、モハンマド・ジャアファルはクルド系を糾合して、マシユハドに進軍した。アミール・アラムもユーソフ・アリーも籠城して抵抗したが、四ヶ月経って冬が近づくと、兩名ともマシユハドを捨てて、各々の本據地に撤退し (ASh204b)、代わって、モハンマド・ジャアファルがマシユハドに入り、クルド系が實權を回復した (ASh205a)。しかし、一一六六—一七五二—三年、アミール・アラムは兵を集めて、マシユハドに進軍した (ASh207b-208a)。戦闘の結果、マシユハドを再征服したアミール・アラムは、ユーソフ・アリーを呼び寄せて、モハンマド・ジャアファル追尾に同行させた。ラーデカーン Radekan でモハンマド・ジャアファルを捕えたアミール・アラムは、やがて策略でユーソフ・アリーも捕えてマシユハドに送り (ASh209a)⁽³⁰⁾、いずれも盲刑に處した。

これによって、アミール・アラムは對抗相手のユーソフ・アリーとモハンマド・ジャアファルの双方を倒し、ホラーサーンでの實權を掌握したことになる。

第二節 第二回遠征の経緯

このような状況の中、一一六七年 Rajab 月八日／一七五四年五月一日、アフマド・シャーは第二回ホラーサーン遠征にカンダハールを出陣した。途中、アミール・アラムの本據地であるカーエンやタバス Tabas など南部の各地を征服し、マシユハドに向かった。

マシユハドで實権を掌握したアミール・アラムは、自らホラーサーンの太守と稱し、シャーロフを完全にその統制下に置き、同地方で絶對的な権力を掌握しつつあった⁽³¹⁾。しかし、アフガン軍の侵攻を知ると、彼はサブゼヴァールに逃走し (ASH224b)、残された者たちがマシユハドの防備に當たることになった。結局、アフガン軍先遣隊による包圍戦となり、膠着状態が続いた。アフマド・シャーも Ramazan 月二五日／七月一六日、マシユハドに入った。

アフマド・シャーの命でアミール・アラムに對して派遣された追尾軍はサブゼヴァールを包圍し、これを捕えた (ASH232b)。ホブーシャーニに送られたアミール・アラムは、モハンマド・ジャアファルの處遇などで彼に復讐心をもつてきたクルド系によって殺害された (ASH235b, MT168)。

マシユハドでは包圍戦が続ぎ、次第に籠城する市内の状況は悲惨なものになり、市民の中から和平を求める聲が擧がるようになった (ASH236a-240a)。結局、市民からの強い要請もあり、Safar 月一六日／一二月二日、シャーロフはアフマド・シャーの許へ行き、謝罪した (ASH242a-b)。シャーロフは三日間アフマド・シャーの陣營に滞在し、Safar 月一日／一二月五日、アフマド・シャーは市内に入り、シャーム・モスク Masjid-e Jame' で彼の名でホトベ Khojbe が讀まれ、貨幣が刻印された (ASH244a-b)。これによって、アフマド・シャーの宗主権を認めたことで、シャーロフはイランの王位に留まることが認められた (ASH250a)。

一方、アスタラーバード方面に逃走した者たちに対しては、アフマド・シャーはシャー・バサンド Shah Pasand Khan

に討伐命令を出した (ASH25b)。ASH によれば、シャー・パサンドはニーシャープール、サブゼヴァールを経てアスタラーバードに進軍したが、水や糧食も盡きたためにやむなく撤退した (ASH260b-261a)。

しかし、カージャール朝期の史料によれば、このあたりの経緯はかなり異なったものとなる。それによれば、モハンマド・ハサン *Mohammad Hasan Khān Qājār* はシャー・パサンドに對して軍を派遣し、⁽³²⁾ 兩軍はサブゼヴァール近郊で戦闘となった。その結果、カージャール軍の勝利となり、アフガン軍はマシュハドへ逃走したという。この件については、比較的中立の立場と考えられる MT 76—78 にも同様の記事が見られることから、シャー・パサンドはカージャール軍に敗れて撤退したものとするのが妥當だろう。いずれにせよ、アスタラーバード制壓軍のマシュハド撤退によって、アフマド・シャーの第二回遠征は終了した。

アフマド・シャーがなぜこの時期にホラーサーン遠征を行ったかについては、明確な点もないわけではない。しかし、アミール・アラムがモハンマド・ジャアフルやユソフ・アリーを倒し、ホラーサーンで確固たる地位を築きつつあったため、それを打倒することが大きな目的の一つであったものと考えられる。

アフマド・シャーはしばしばインド遠征を行ったが、⁽³³⁾ それに對して、ホラーサーンには三回しか行っていない。こうしたことから、彼がホラーサーンをさほど重視していなかったのではないかと推測することはできる。しかし、彼の三回のホラーサーン遠征當時の状況を検討すると、同地方の政治的な轉換點に遠征を行っていることが判る。第一回遠征は第二次政變の直後、第二回遠征はアミール・アラムという地方勢力が事實上ホラーサーンの實権を掌握した直後というふうに、ホラーサーン内部での勢力關係に變化が起こったときに實行されている。一七六九—七〇年の第三回遠征も、ここでは詳しく検討する餘裕はないが、⁽³⁴⁾ シャーロフの二人の王子、ナスロッラー *Nasrollāh Mirzā* とナーデル *Nader Mirzā* の成長と臺頭とは無縁ではない。

こうしたことから、アフマド・シャーは決してインドに較べてホラーサーンを輕視していたわけではないことが推測で

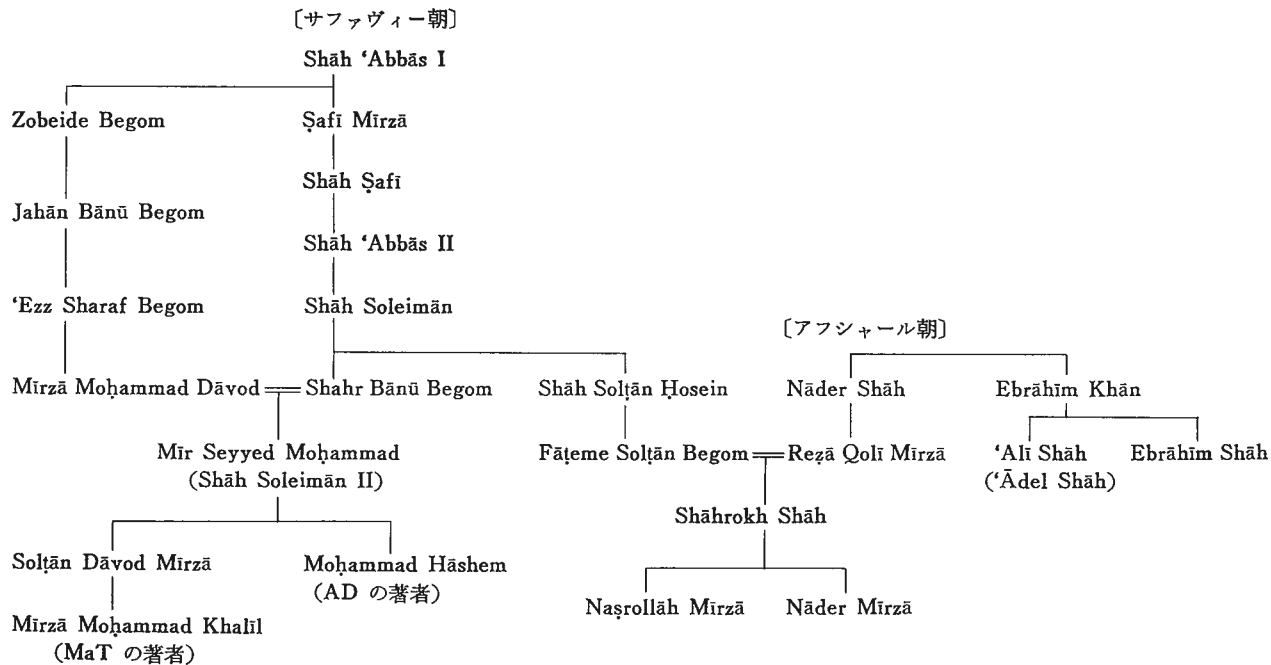
きる。ホラーサーンに強力な勢力が形成されそうになると、それを倒すために進軍しているのである。その代わり、それ以外の場合には、基本的にはシャールーフの地位を認め、それへの影響力を保持するのに留めていたものと思われる。そうしたことから、アフマド・シャーは、イラン西部への出口としてのホラーサーンの位置に一定の評価を與えていたように思われる。

結 語

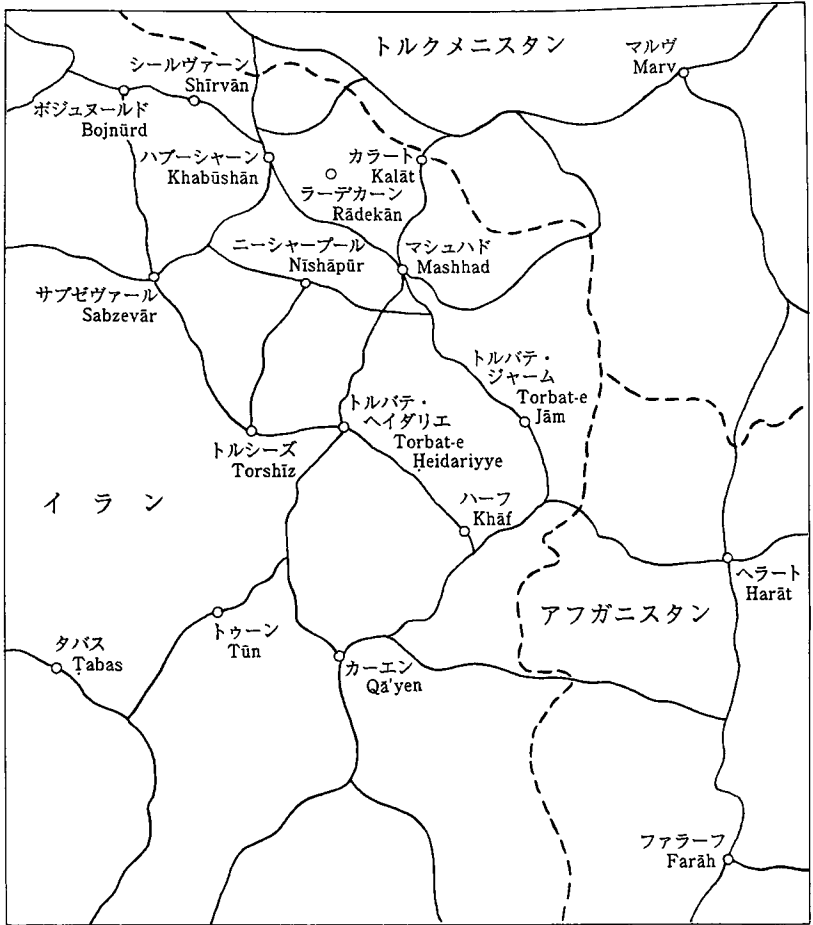
本稿では、一八世紀中期のホラーサーン情勢を、特に同地方の地方勢力とアフマド・シャーに注目しつつ、検討していった。その結果、二回にわたる政變が單にマシュハドにおける王位をめぐる抗争というだけではなく、ホラーサーンの地方勢力の周辺の諸勢力に對する危機感の表れであるとともに、彼らの内部での對立・抗争の結果でもあったことが明らかになった。また、アフマド・シャーのホラーサーン遠征も、このような同地方の動向と無關係に行われたのではなく、むしろ、この地方の情勢の變化と密接に關連して行われたことも明白になった。すなわち、ホラーサーンの動向はドッラーニー朝の動きと連動していたのである。

このような状況は、史料の面からも指摘することができる。本稿では、従来はドッラーニー朝の史料としてイラン史研究ではさほど關心の拂われてこなかったASHを基本史料の一つとして利用した。ASHは従来廣く利用されてきたMTやMaTなどの「イラン側」史料には見られない記事を多く掲載しており、史料の乏しい状況を補っていた。特に、ADやMaTはサファヴィー家縁者の執筆したものであり、たとえば、第一次・第二次の政變に關しては、當事者の家族による史料ということで、利用の際には細心の注意が必要である。それに對して、ASHはこれらの事件については、より利害關係の少ない立場から書かれており、その記述は信用できるものと考えられる。また、ホラーサーンのさまざまな状況を伝える貴重な記事が含まれていることも明らかになった。

〔関係系圖〕

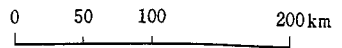


関係地圖



凡例

- 現在の国境線
- 主な道路



もちろん、ASH もその史料的な性格上、アフマド・シャーやドッラーニー朝についての記述については、利用には注意が必要となる。たとえば、彼のホラーサーン遠征について検討する場合がそうである。當事者であるがゆえに記事の量は豊富であるが、それをどこまで信頼できるのかについては慎重さが要求される。しかし、その場合でも、MT やカーシャル朝期の史料などと比較対照することで、かなりの部分で利用できることも判明した。こうしたことから、ASH などのドッラーニー朝側の史料であっても、一八世紀中期以降のホラーサーンを検討する際に、利用することに値することは明白であろう。

このように、従来、ほとんど着手されていない一八世紀中期以降のドッラーニー朝期のアフガニスタンの諸問題の中には、イラン史を検討していく上で、併せて考察されるべきものが少なくないように思われる。前近代末期のイラン史を考えていく上でのアフガニスタン研究の必要性は再認識されるべきだろう。

註

(1) 本稿におけるアフガニスタン関係のペルシヤ語表記の母音の轉寫は、とりあえず現代イランのペルシヤ語の場合に準じることとする。

(2) このような見方は、Fletcher, A.: *Afghanistan—History of Conquest* (Ithaca, 1965) p. 57 などの概説書にはしばしば現れる。なお、現在のアフガニスタンでは、アフマド・シャーを「アフガニスタンの父 (Baba-ye Afghanistan)」と呼んでいる。

(3) この問題を考察する際、一九世紀初頭においてすら「アフガニスタン西部の住民は自らの居住地域を「ホラーサーン」としていたとするエルフィンストーン M. Elphinstone の記述

を紹介し、廣義のホラーサーンの存続の可能性を示唆するゴッズ氏の見解 (Gomans, J. J. L.: *The Rise of the Indo-Afghan Empire, c. 1710-1780*, Leiden, 1995, p. 11) や一九九二年夏にペルシヤ語の表示があったという證言 (Lee, J. L.: *The 'Ancient Supremacy'—Bukhara, Afghanistan & the Battle for Balkh, 1731-1901*, Leiden, 1996, p. 1, n. 1) など、貴重な判断材料となるであろう。

(4) AD のフォリオ数は、原文のものと大英圖書館で付したものの間に、三頁の開きがあり、前者の方が少ない。これは、後世の人の目次と表紙を後者が数えていることによるも

のである。本稿では、後者を準拠するにとする。

- (5) ADの著者、Kinniburgh、Neeshaはセイユド・モント下の五男、Matの著者、Mierlザー・モントマド・ハリエルはセイユド・モントマドの孫(長男ソルターン・ダーヴキヤ Soliān Davod の子)である。また MTの著者、クリンターネはインガルのセルシキヤ・マーズ・Marshedābdに亡命中の一一九五—一〇七八—一〇二二年に回書執筆したとされたが、その際、同地でいたソルターン・ダーヴキヤの回書と参考されたであろう。Ash を含むこれらの史料は、Ash の著者 Perry, J. R.; Karim Khan Zand—A History of Iran, 1747-1779 (Chicago and London, 1979) の史料解説 (pp. 303-316) の該当箇所を参照せられた。

(6) Ash 執筆以外の経緯や著者のトントム・マニ・ホセニリードの「Zand」Gandmyparov, D.; Vvedenie, *Ta'riḫ-u Akmaod-Shāxū, k. 1, Moskva, 1974, стр. 22-23* を参照せられた。

(7) ホラーサーン・タズマの「Zand」Komaki, S.; Khorasan in the Early 19th Century ("The Journal of Sophia Asian Studies", 13, 1995), p. 85 を参照せられた。また、上記の小論文を拙稿「十九世紀初頭のホラーサーン——初期のカーシヤール朝の「Zand」(『土著』107, 一九九二)の改訂英語版である。

(8) カーシヤール族のモントム・ハサン Mohammad Hasan Khān Qājār (カーシヤール朝初代バーカー・モントムの父) の「Zand」シャーロン側を走らした。

(9) 意見の限りでは、ナーデル・シャー期の史料はこの「Zand」は現れな。

(10) この背景にはエブラーヒーム軍内における、キズィルバシー系とアフガン系・ウズンク系の対立関係があったであろう。難関として「Zand」を走らしたキズィルバシー系をセイユド・モントムは承認しようとした。AD79b-80a を併せて参照せられた。

(11) 拙稿「サント朝の成立過程について——一八世紀イラン政治史上の諸問題」(『土著』107) 五、一九八七、以下「サント朝」四二—四三頁。

(12) AD90b-91a → Ma T110-111 Zand, 上記の「Zand」系・キズィルバシー系を走らした十六名の氏名を以下の通り挙げておいた。() 内は本稿地名。

- Amir 'Alam Khān Khazime (ホーミン), Bahād Khān Tātār Marv (ホーミン), Almad Khān Bayāt (リナーターターニ), (Mohammad) Ja'far Khān Kord (ベナーンターニ), Mohammad Hosein Khān Kord Zāfrānlū (ベナーンターニ), Ebrāhīm Khān Kord Keivānlū, Karīm Khān Borbor, Mahdī Qolī Khān Chulē'i, Manšūr Khān Siyāh Manšūr, Amir Khan Mish Mast Tūpchi-bāshī, Mirzā Amin b. Mirzā Shams al-Din Mōhammad Kalāntar, Mirzā Sharīf Mostoufī al-Mamālek Tabrizi, (Mohammad) Hasan Khān b. Faḥr 'Alī Khān Qājār (ホスティーニ), Salim Khān Beglarbegī-ye sābeq-e Kermānshāhān,

Hosein Khān Qarāi (ムルバチ・イタリキ), Shah-rokh Khān Chingizi.

このことかゝるトルコ系、クルド系、アラム系などを知りな勢力だけでなく、文官にもセイイヒユ・キントンの支持者がいたことが明らかである。

- (8) MaT114 は、キントンの三世の副官を Moharram ibn-i-Omar といふが、この名をキエロン語題の Omar として MT は、中世初期のトルコの歴史や幾何の論議のためと Safar ibn-i-Omar 即位を行つたと傳へて居る。このことは後述の。
- (11) Perry, J. R.; *The Last Saffarids*, 1722-1773 (“*Iran*”, 9, 1971), 特記 pp. 65-66.
- (15) 「キント朝」 四三頁。
- (19) 「キント朝」 四二一四三頁。
- (17) この点については状況が、少なからず一八二〇年代頃まで思ふべきだ。Komaki, op. cit., pp. 95-96.

- (8) AD102a-102b, MaT120-121 は、このころの副官と由立傾向を思ふ始めていたヒラータヤントーン、マヤニン、ジャンゴといったイラン各地の太守 beglarbegi など、の活躍が述べられていた。

- (6) AD110a, MT52, MaT131 は、これ、新人事は以下の通り。

Vakl-e-Salanat

Sharaf Khān b. Amīr Aṣḡān

Khān Qarqlū

Qorchi-bāshi

Saleh Khān Bayāt (トローネ

ク beglarbegi) (着任中)

Hajji Seif al-Din Khān (中)

Tofangchi-bāshi

Ja'far Khān Kord

Divānbeği-ye Sarkar-e 'Azmat-e Madar-e Shāhi

Mohammad Hosein Khān

Kord Zafānlu

- は、MaT は、Amir Aṣḡān Khān 及び Vakl-e-Doulat-e 'Āliyye といふ二名の Sharaf Beg 及びその副 nāyeb といふ二人を、MT29 は、Amir Aṣḡān Khān を、副官として、トローネ・シヤード處刑をせよと、諷刺を込めた。
- (20) MT54-55 は、この夫人が書状を送つた者たまたまの通。

Yusuf 'Alī Khān Jalāyer, Qorbān 'Alī Khān Jazāyerchi-bāshi Qarqlū, Bakandi Bek Afshār Jārechi-bāshi, Ferdūn Khān Nāyeb-e-Qollar-āqāsi, Qāsem Khān Nasāqchi-bāshi, Karīm Khān Borbor Qourfāshi Yasāvvol, 'Alī Yār Khān Chūle Tūpchi-bāshi, Manūr Khān Salsiper Chandāval-bāshi.

- (12) この事件の経緯については、AD110a-116a, MT55, MaT 132-137 を参照。なお、夫人がキエロンの目には問題なく聞かされた反亂軍が、實情を知つたため、動搖したといふ (ASh99a, MT55)。は、Malcolm, J.; *The History of Persia from the Most Early Period to the Present Time* (2 vols., London, 1815, repr., Tehran, 1976), vol. 2, p. 112 は、この政變がキエロネ・キントンの殺害を述べた。

おれているが、実際には幽閉されたわけであった。AD1212によれば、一一七六年 Zi Qa'de 月六日—一七六一年六月九日まで没した。

- (22) Schefcr, C.; *Histoire de l'Asie centrale par Mir Abdoul Karim Boukhary—Afghanisan, Boukhara, Khiva, Khogand depuis les dernière années du règne de Nadir Chah, 1153, jusqu'en 1233 de l'hégire, 1740-1818 A. D.* (Amsterdam, 1970) 所収のペルシヤ語テキスト、p. 9.

- (23) カーン朝後期の代表的な史書である“*Tarikh-e Montazem-e Nāserī*”は、カーン朝王家の祖であるカンパレ・カンム國孫の築く一七五四—一五年の第一回歴史を著したものである。Fatemād al-Saltane; *Tarikh-e Montazem-e Nāserī* (ed. by Razavī, M. E., 3 vols., Tehrān, 1363-1367/1984-1989), vol. 2, p. 1154.

- (24) Singh, G.; *Ahmad Shah Durrani—Father of Modern Afghanisan* (Bombay, Calcutta, New Delhi & Madras, 1959).

- (25) Razavī, M.; *Harāshī wa Touzīhā-e Mosābeh* (MT 雜著の49回書の内容と解説) pp. 407-414. なお、ノンパリスマンの著述の表題のノンパレ・シャー研究は、Ghobar, M. Gh. M.; *Ahmad Shah Bābā-ye Afghān* (Kabul, 1322/1943-4) chap. 28, 30, 31, 36, 特々 p. 211 の註の語を採用了こと。

- (26) ホラーサーン軍のシラート征服の際、ノンガン側でホラー防衛に当たっていたのはノンパレ・シャーの長子ティムール

ル Teimūr (後シャー)であった。彼はホラーサーン軍に敗れ、シラートを放棄して逃走した (MT 49, Ma T127)。

- (27) 包圍の期間については諸説ある。MT 63 は九月より十一月、チーン氏は一四日間と云う (Ghobar, *op. cit.*, p. 211) しかく、一七五〇年早春に出陣して、後述の通り、同年秋にはカンドハントを降伏したと云うのである。Ash は従って、四月と云うのが妥當である。

- (28) ASH 133b によれば、これに應じて派遣されたクルム系の武將たちは、次の通り。

Nāqd 'Alī Khān (カンパレ・シャブマルの兄弟)、
Mohammad Rezā Khān Kohinkū, Mohammad Hasan
Khān Bādū, Ebrāhīm Khān Keivānū, Ebrāhīm
Khān Baghāyeri.

- (29) Perry, *Karim Khan Zand*, p. 8. なお、たゞ、Singh, *op. cit.*, pp. 88-89 のように、カンドハント征服の際、ノンパレ・シャーはノンガン側宗主権承認を条件にカンドハントの地位を認めたとの見解があるが、少なくとも、ASH・MT によりの記載は、カンドハントの1751年 ASH 145b によれば、カンドハントのサルダールのマニール・マーンがホラーサーンの軍司令官 *sepaṣaltār* に任じられ、ノンパレ軍と行動を共にしたとの記事がある。マニール・マーンはフリー・シャー時代からカンドハントのシャー *Kermānshāh* 要塞の守護を任じられた (MT 21)。カーシャル族のキンブド・ハンサンと同様にエブラーヒームから離反して、シャーロフに従った人物であった (MT 32)。シラート陥落時にノンパ

ド・シャーに服従したことから、この地位が與えられたものと思われる。アフガン軍はホラーサーンでは激しい抵抗を受け、たために (Razavī, *op. cit.*, p. 408) 少くともホラーサーンとの関わりの薄いアミール・ホーンを登用し、同地方を勢力下に置こうとしたものと考えられる。

- (30) アミール・アラムはユースフ・アリーのの本據地であるカラートに保管してあったナーデル・シャーの財寶の略奪も行った (ASH209b-210a)。

- (31) Razavī, *op. cit.*, p. 404. なぎ 彼は廢王トイヒズ・モンメンに自らの子を王にするよう求めたが、拒否されたとい

う。

- (32) Moḥammad Fatḥollāh b. Moḥammad Taqī Sārtī; *Tazriḥ-e Moḥammadi—Aḥsan al-Tawārīkh* (Ṭabātabā'ī Majd, Gh. R. ed., Tehran, 1371/1992-3), pp. 36-37.

- (33) キヤング氏によれば、八回である。Singh, *op. cit.*

- (34) 第三回遠征について、もしもたりの ASH608a-615a, MT 113-119 を参照された。キンド朝期の史料では、今のムラド Abū al-Hasan Ghaffārī Kāshānī; *Golsḥan-e Morād* (Ṭabātabā'ī Majd, Gh. R. ed., Tehran, 1369/1990-1), pp. 633-638 が最も記述内容が豊富である。

the situation of competing various powers, the China Maritime Customs became a power independent from the Chinese government. The Maritime Customs maintained a neutral position by functioning as an intermediary in Chinese politics. In the period when Aglen was Inspector General of Customs, it began to participate in Chinese politics. The Maritime Customs had two anchors to secure it: the security it provided for foreign loan obligations and the security it provided for Chinese investments. But as internal political opposition intensified, Aglen thought it wise to consolidate another base of power. Aglen demanded the support of district authorities for Customs administration. In other words, he intended the Maritime Customs to become in part a central government organ and in part an organ of the provincial government. He aimed to realize this intention by participating in district tax collection. The Peking Special Tariff Conference was to be the forum in which Aglen's intention was to be realized. However, the Special Tariff Conference did not proceed according to plan, and Aglen's designs were not realized.

**KHORĀSĀN IN THE MID-EIGHTEENTH CENTURY :
THE DORRĀNĪS AND THE AFSHĀRS AFTER THE
ASSASSINATION OF NĀDER SHĀH**

KOMAKI Shohei

Major political changes occurred immediately following the assassination of Nāder Shāh Afshār in 1747. A struggle for succession took place among the Afshārs in Khorāsān, and in the end, Shāhrokh became ruler. However, two coups occurred in 1749 and 1750, and once Shāhrokh lost his power. Local powers in Khorāsān played important roles during these disturbances. When threatened by enemies from outside Khorāsān they united, however, when not facing such a threat they repeatedly struggled for power among themselves. Aḥmad Shāh Dorrānī made two expeditions under such circumstances, and in conquering Mashhad he forced Shāhrokh to submit to him. Following this, he acknowledged Shāhrokh's right to

rule in this area. Khorāsān then came under the powerful influence of the Dorrānīs. We must not ignore the role of the local powers and the Dorrānīs in an attempt to reconstruct the political situation in Khorāsān in the mid-eighteenth century.